

【4】 児童の実態

(1) 障害の種類・程度

小学部の児童の障害の種類及び障害の程度はおおむね次のようである。

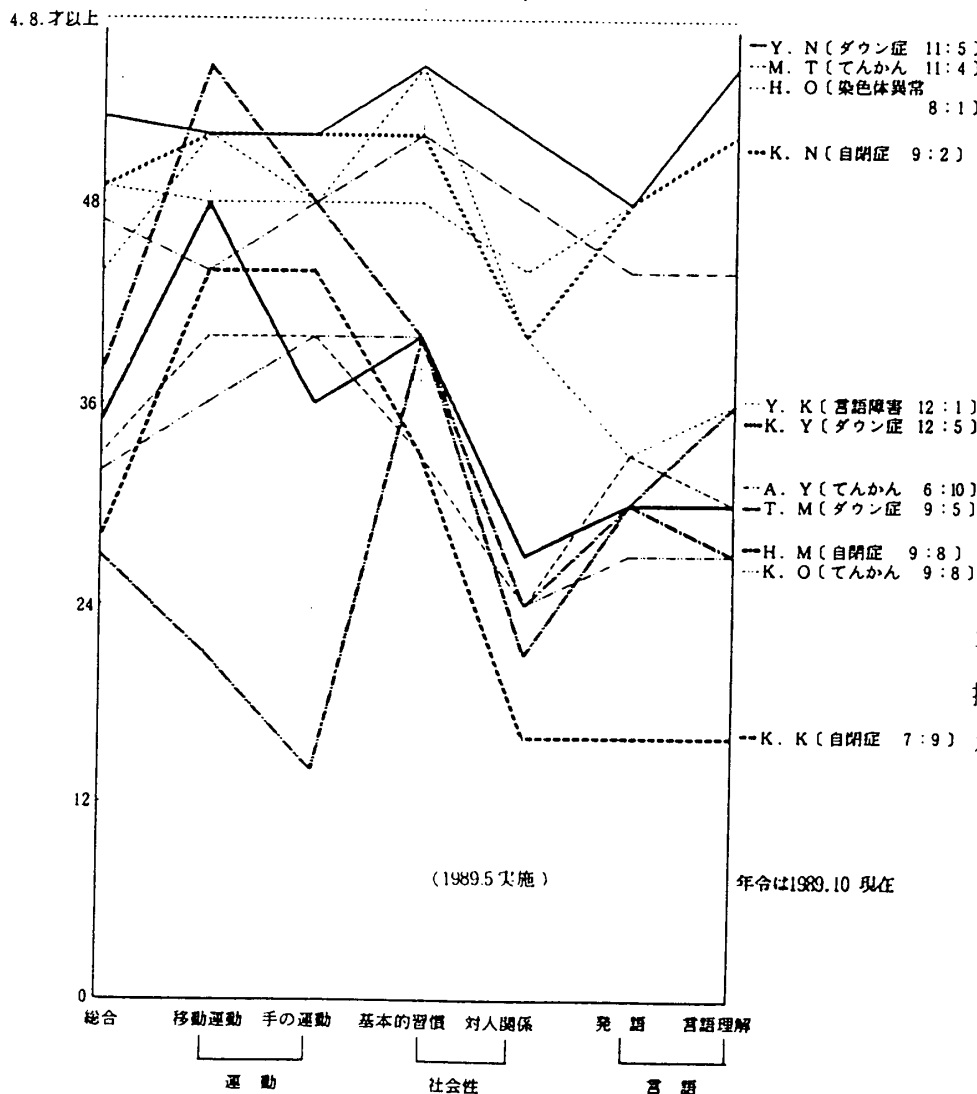
① 障害の種類

障害名	自閉症	てんかん	ダウン症	言語障害	染色体異常
人数	3名	3名	3名	1名	1名

② 障害の程度

	重度	中度	軽度
人数	0	9	2

(2) 遠城寺式乳幼児分析的発達検査



(3) からだの輪郭表

① からだの輪郭表について

からだの輪郭表は、児童の主に身体の使いこなしの実態を把握するために小学部で作成したものであるが、本年度、中学部との連携により改訂した。その内容としては、手・指の機能、探索・道具の操作、着脱、食事、運動、遊具・遊びの6項目があり、12才くらいまでに達成可能な日常的なからだの使いこなしを主とした内容を抽出し配列している。その内容については、津守式乳幼児発達検査、養護学校学習指導要領、生活科指導の手引き、田中昌人氏の『子どもの発達と診断』、本校で作成した段階別教育内容表から取り上げた。

② からだの輪郭表の実施方法

からだの輪郭表を使って児童の身体のこなしの実態をとらえるにあたって、一覧表を作成した。これはひとつひとつの調査項目が、発達段階から見てどのような段階にあるかということをしっかり押さえ、調査を進めていく中で、その子が現在どのような発達段階にいるかということをつかむためである。

調査は主に学級単位で行ったが、調査に用いる道具等については共通のものを使用し、観察の仕方についても事前に共通理解を図るようにした。

③ からだの輪郭表を通してみられる児童の実態

- 小学部児童の発達は3～4才くらいの間にある。
- 生活習慣及び興味関心と結びつきの強い食事・調理についてはほぼ5～6才レベルに達している。
- 運動を中心とした粗大運動に比べて、手指の機能、道具の操作といった微細運動が劣っている。
- 初めて行う検査項目については、できる児童は少なかった。
- 運動面においては、ケンケン、バランス等の調整力を必要とするものが他と比べて劣っている。

④ 今後の指導にあたって

- 個人差に応じて、配慮して指導していく。
- 児童の興味関心の強い食事・調理や、着脱・被服といった経験回数も多く発達に合わせて定着度の高い学習を通して、言語・微細運動といった発達の遅れている分野を伸ばしていくようにする。

⑤ 今後の課題

児童の調査当日の調子によって検査の結果が大きく変わることが予想されるので、数回にわたって連続して調査する必要がある。

	0～1才	1～2才	2～3才	3～4才	4～5才	5～6才
手指の機能	100	75	100	100	83	33
道具の操作	100	100	100	80	86	71
着脱・被服		100	100	80	100	100
食事・調理	100	100	100	83	100	100
言語	67	100	100	50	100	33
遊び・遊具		100	100	89	100	50
運動	100	100	100	80	100	78
音楽・リズム		100	50	100	100	33

75%以上 74～50% 49%以下

(4) MEPA (ムーブメント教育プログラムアセスメント)

① MEPAについて

ムーブメント教育の達成課題(からだづくりの課題)への達成度を把握して指導の手がかりを得るためのテストであり、次のような構成と内容でできている。

構成と内容

MEPA プロフィール表
Profile for Movement Education Program Assessment

		79	79	79	77	77	79
7	61-72	28	28	28	26	26	28
		27	27	27	25	25	27
6	49-60	26	26	26	24	24	26
		25	25	25	23	23	25
		23	22	22	21	22	23
5	37-48	22	21	21	20	21	20
		19	19	19	17	17	19
		18	18	18	16	16	18
		17	17	17	15	15	17
		16	16	16	14	14	16
4	19-26	15	15	15	13	13	15
		14	14	14	12	12	14
		13	13	13	11	11	13
		12	12	12	10	10	11
3	13-18	11	11	11	9	9	10
		10	10	9	8	8	9
		9	8	8	7	7	8
2	7-12	8	7	6	6	6	6
		6	6	5	5	5	5
		5	4	3	4	4	4
1	0-6	2	3	2	3	2	2
		1	1	1	2	1	1

分野	領域	内容
運動・感覚	姿勢	反射を含む主に静的なもの
	移動	物を媒介としない主に動的なもの
	技巧	物を媒介とする主に動的なもの
言語	受容言語	語い・関係用語・比較用語・指示の理解等
	表出言語	語い・関係用語・比較用語の表出等
社会性(情緒を含む)		主に対人的な反応や対人関係

チェックステージ(発達年令段階)

第1ステージ(原始反射支配ステージ)	0カ月～6カ月
第2ステージ(前歩行ステージ)	7カ月～12カ月
第3ステージ(歩行確立ステージ)	13カ月～18カ月
第4ステージ(粗大運動確立ステージ)	19カ月～36カ月
第5ステージ(調整運動ステージ)	37カ月～48カ月
第6ステージ(知覚-運動ステージ)	49カ月～60カ月
第7ステージ(複合応用運動ステージ)	61カ月～72カ月

上に示すプロフィール表の各領域に於る数字は、各分野・領域に於る各ステージ(発達年令段階)での具体的な内容と対応している。それぞれの具体内容を評定し、(+)になった内容の数字の部分に黒くぬりつぶして、到達している発達段階を知ると同時に、未達成の課題を明確にすることができる。次に具体的な内容の一部を示す。

MEPA 評定表
第3ステージ 13～18カ月発達レベル

分野・領域	内容	評定(1)	評定(2)	
運動・感覚	姿勢 (主に動的なもの)	P-10. 座って、一方の足先を引くと、頭、胸部が立ち直り引かれまいとする。 11. 立位からひとりで座る。 12. 立たせ、左右前方に引くと、平衡を保つため一方の足を踏み出す。		
	移動 (ものを媒介としない主に動的なもの)	Lo-9. 人につかまって歩く。 10. 階段を遠くあがる。 11. ひとりで歩く。 12. 手すりにつかまって階段をのぼる。		
	技巧 (ものを媒介とする主に動的なもの)	M-9. 2階の積木を重ねる。 10. ものを投げる。(ボールをF手から) 11. 茶碗の中の小球を取り出す。 12. 大きなボールをける。		
特記事項				

また、ムーブメント教育の重要なねらいである身体意識、調整力、筋力・持久力の様子を捉えるために、クロスインデックス表による処理がある。この処理によって、それぞれの力を各発達年令段階の満点(100%)に対する比率で捉えることができる。

② プロフィール表による結果

■は100%通過、□は11名中9人が通過(約80%)、
□は11名中7名通過(約60%)である。数字は通過人数。

1～11は通過の人数を表している。

- 運動・感覚に関しては、11名中8名が4ステージ(3才)をほとんど通過し、4ステージを通過していない子への個別の配慮をしながら5ステージ(4才)を充実していてもよい集団といえる。
- 言語に関しては、感覚・運動に比べて4ステージの通過率が $\frac{1}{3}$ と低い。
- 6～7ステージ(5～6才)のグループがある。
- 各項目とも通過率の高い子はほぼ共通しているが、運動感覚では通過率の高かった自閉症の子は、言語・社会性では通過が最も低い方となっている。
- とびこしにグループがある。

MEPAプロフィール表

7	61-72	2	2	3		1	2
		2	3	6		1	2
6	49-60	4	5	7	4	7	5
		7	8	3	3	2	3
		7	7	7	6	1	1
5	37-48	5	4	5	4	2	4
		3		10	7	5	3
		8			3	8	7
		8			3	8	5
4		10		10	5	3	3
4	19-36	10	10	9	7	6	
		10	10	9	9	6	3
		10				6	3
		10				6	3
3	13-18						10
2	7-12						
1	0-6						
1	12ヶ月	運動	移動	技巧	受容	表出	対人関係
1	12ヶ月	分野	運動・感覚		言語		社会性

③ クロスインデックス表による結果

得点の左は昨年のものである。各項目で得点の高い子低い子に印をしている。

- 調整力、筋力、持久力に比べ身体意識が低い。
- 昨年に比べ、言語、社会性は変化が少ない。
- 同じような得点でも、暦年齢が違くと日常の行動は違う。

④ 考察される実態と指導の重点

- 運動・感覚を中心にした指導の組み立て、言語や社会性を引き上げようとする考え方に一致している。
- 能力の高い児童、低い児童のため、一つの道具で複数の課題を設定する工夫が大切である。

氏名	学年	障害名	身体意識				調整力		持久力・	
			運動・感覚	言語・社会	調整力	調整力	持久力・	持久力・		
A Y	1	てんかん	71	50	81	78				
K K	2	自閉	65	34	62	73	85	95		
H O	2	染色体異常	87	75	86	93	97	95		
T M	3	ダウン	55	44	65	66	72	78		
K N	3	自閉	87	78	89	89	92	90		
H M	4	自閉	89	50	93	88	96	97		
K O	4	てんかん	53	47	61	63	65	68		
M T	5	てんかん	89	88	92	93	86	85		
Y N	5	ダウン	98	94	99	98	99	100		
K Y	6	ダウン	56	66	63	68	65	70		
Y K	6	言語障害	87	81	96	93	93	93		

- 昨年度のからだの取り組みの効果は現われていると思われる。更に、身体像、身体図式を育てる運動を学習に多く取り入れ、運動とセットして言葉で指導していくことが大切である。
- とびこしの把握をし、配慮したとりくみも必要と考える。

(5) 意欲についての実態調査

小学部の11名の児童にとって、楽しんで取り組める遊びに対してはどんな表情や様子で取り組んだりどの程度集中できたりするかという調査をした。

これは、それぞれの教科や指導形態の中で我々がどのような姿を子どもたちに望むかという指標ともなるものである。また、実践した結果、この集中度や満足の仕方・楽しみ方が変わっていくことも予想される。

- 好きな学習に対しては10分～40分ぐらいの間集中できる。しかし、その個人差は大きく、日によって違う子もいる。かなり集中して遊んだり学習したりしている。
- その様子はほとんどの子が黙々と取り組んでいるが、目を合わせてにこにこしたり自然に会話したりして楽しそうな様子も見られる。

(6) 実態調査から考察

- ① 2才～5才の発達を示し、個人差が大きい。個人目標や個に応じた配慮・てだてが必要である。3才前後の発達課題である「みたてつもり活動」の段階にいる子が多い。
- ② 遠城寺式検査・MEPA等の結果から言語面が劣っているのに比べ運動面が高いことが類推できる。高い方の運動面に着目しながら言語面や社会面を指導していくことが子どもの活動を引き出しやすく子どもたちも楽しむことができる。
- ③ 運動という面に着目すると、鉄棒のぶらさがり・片足立ち・けんけん等日常の生活の中では経験しにくいものが出来ていないし出来ていたとしてもそのできかたは弱い。意図して組み立てた生活をしていかなければならない。
- ④ 遠城寺式検査やからだの輪郭表でも、日常の生活で経験したことに関しては高い数値が出ている。普段の生活の中で繰り返して指導していくことが大切であるといえる。
- ⑤ 相対的に遅れている言語や社会面もからだにアプローチしていくことで押し上げることができよう。また、表現という視点を取り入れることによって対人関係も育っていくと考えられる。
- ⑥ 設定された場面であるリズム・サーキットや設定遊びで、指導者と一緒ならかなりからだを動かすことを楽しむことができだしている。まだ自分から進んで遊べたりからだを動かす子は少ないので指導者と一緒に遊んだりからだを動かしたりする場面を作っていきたい。